

第7回 きじむんの どう〜ちゆいむに〜

〜茶畑発祥地・糸蒲寺跡・田芋発祥地〜

はいさーい！ きじむんやいびーん。
今回は、琉大東口付近にある史跡を紹介します。

茶畑発祥地：琉大の体育館付近は、琉球王朝時代は、茶山（チャーヤマ）という山で、琉球初の茶畑でした。歴史書『球陽』の尚敬王21（1733）年の項目に記載されています。残念ながら、今はその面影はありません。



茶畑跡周辺



糸蒲寺跡

呪いを吐き、乳房をかみ切って自殺。僧侶は糸蒲寺の財宝を糸蒲御嶽へ隠し、櫃（ひつ）に入りました。直後に寺は炎上して焼失。その後、櫃の中は空っぽになっていた（=天へ帰った）そうです。その後、ノ口の家



歴史の道

糸蒲寺跡：琉大東口を出ると、東側に小高い丘があります。琉球王朝時代は、そこに糸蒲寺がありました。

『琉球国由来記』巻14の212-1の記述によれば、日本からの補陀落僧（ふだらくそう）が住職をしていました。この寺は、糸蒲ノ口と糸蒲寺住職の伝説が有名です。

幼い女の子を家の外へ追い出して話し合いをしていた糸蒲ノ口と僧侶は、この幼女の言葉によってノ口の夫に密通を疑われます。二人は憤慨し、糸蒲ノ口は、「この家の女子は未切れ未切れ（=女子は途絶える）」、という石段だけが残っていたそうです。

火事で寺が焼失する瞬間、寺の本尊が首里城の漏刻門（ろうこくもん）に現れたという伝説もあります。

糸蒲寺の東は、糸蒲遺跡というグスク時代の遺跡で、グスク系土器や青磁片が出土します。糸蒲寺の東側道路は、王府時代の主要道路で、今は「歴史の道」と呼ばれています。

また、丘の上にはこの付近の沖縄戦没者800柱を祀った慰霊塔「糸蒲の塔」もあります。



糸蒲の塔

田芋発祥地：糸蒲寺の周辺は、琉球の田芋発祥地です。糸蒲寺の補陀落僧が、日本から持ってきた田芋を寺の近くに植えました。そこから沖縄中へ広まったという伝説があります。

ほかにも琉大内や付近の史跡やスポットはたくさんあります。

続きは、また次回に御案内します！（沖縄資料担当：AS）



田芋発祥地付近

参考文献

- 西原町史編纂委員会編『西原町史』第四巻資料編三 西原の民俗 平成元年3月
- 西原町史編纂委員会編『西原町史』第五巻資料編四 西原の考古 平成8年3月
- 仲間勇平・仲地宗俊・菊池香「琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査」『琉球大学観光学部学術報告49号』平成14年12月
- 宮野沼市教育委員会文化課編集・発行『どのわんの地名内陸部編』平成24年3月

平成26年10月1日発行

第8回 きじむんの どう〜ちゆいむに〜

～医学部 「献体者の碑」「獣魂碑」～

ハイサーイ！ きじむんやいびーん。
今月は、医学部の「献体者の碑」と「獣魂碑」をご紹介します。

医学部で医師となるためのカリキュラムには多くの科目がありますが、そのひとつに人体解剖が義務づけられています。つまり、医学の発展は、自分の遺体を医学の発展のために献納してくださる方々に支えられています。

医学部内には、献体者の納骨堂と慰霊碑、「献体者の碑」が琉球大学でいご会によって建立されています。



「献体者の碑」は、医学の発展のために自らの遺体を献納された方々に深く感謝し、その精神を永久に顕彰するとともに、献体運動を広め、世界人類の幸せに役立てる事を祈念して、平成18（2006）年10月に建立されました。献体者のご尊名が刻銘されています。

刻銘された方々は、琉球大学でいご会会員、東京医科大学東寿会協力会会員および一般の方々です。ここでは、毎年11月に医学部解剖体慰霊祭が行われています。

また、医学部では、医学のために動物実験が行われています。その動物たちの獣魂碑が、医学部の南側に建てられています。「獣魂碑」と大きな石に刻まれています。

医学部に立ち寄った際には、ぜひ立ち寄り、医学の発展のために自らの遺体を献納した方々や動物実験の動物たちへ思いを馳せてみてください。

学内の史跡など、また次回にご紹介します！

（沖縄資料担当：AS）



平成26年11月1日発行

第9回 きじむんの どう〜ちゆいむに〜

～農学部内 イシグスク～

はいさーい！ きじむんやいびーん。

今回は、農学部にあるイシグスクを案内します。

通常、農学部関係者以外には公開していないエリアで、特別な許可をいただいて取材・撮影をしました！

イシグスクとは

農学部の敷地内（字千原）には、イシグスク（西原町指定文化財）があります。琉球王国の時代に自然の断崖を利用して築かれた人工の小高い丘です。イシグスクの西方400メートルの場所に、榎原グスク（14・15世紀の築城）がありますが、その守りのため支城としてイシグスクが作られたといわれています。

イシグスクは、自動車道の新設や、平成14年7月の民間の土地造成工事で一部が破壊されたので、かつての姿は見る事ができません。現在のイシグスクには、榎原集落の古い墓があります。津覇高墓（つはたかばか）や、第五回で紹介した「先代 大殿内門中按司墓（うふどうんちもんちゅうあじばか）」などです。発掘調査報告書によれば、破壊前には無数の古墓群がありました。21基の墓を確認しています。



イシグスク 農学部側から撮影



珍しい5邊の墓 一部崩落。砲弾跡あり

イシグスクの戦争遺跡

第二次世界大戦の沖縄戦の時の戦争遺跡も残っています。

昭和19年8月頃から、千原一帯に石部隊（いしぶたい）が駐屯しました。百人ほどの兵隊がいたようです。地元住民を総動員し、日本軍のイシグスク陣地壕、高射砲、210高地などを作りました。

昭和20年4月1日、米軍が北谷町砂辺から上陸すると、その日のうちにこの付近に到達。すぐに激戦地となり、一面焼け野原となりました。イシグスクは真っ白な岩山と化し、そこに人骨がごろごろと転がっていたそうです。生き残った石部隊は、武見中將をはじめ2、3名のみでした。現存する

墓には、砲弾の後などが無数に残っていて、沖縄戦の激しさとその爪痕を見ることができます。これらの墓は現在も子孫によってお参りされています。

これらのほかにも琉大内の史跡やスポットはたくさん。
また次回に御案内します！（沖縄資料担当：AS）

参考文献

- 西原町史蹟調査委員会編『西原町史』第五巻資料編四 西原の考古 平成8年3月
- 仲間勇栄・仲地宗徳・菊池香『琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査』『琉球大学農学部学術報告49号』平成14年12月
- 宜野湾市教育委員会文化課編纂・発行『ぎのわんの地名内陸部編』平成24年3月
- 沖縄県教育庁文化財課編『イシグスク内古墓群』沖縄県教育委員会、昭和61年3月

取材協力 琉球大学農学部亜熱帯フィールド科学教育研究センター



墓口の上は、砲弾あと

平成26年12月1日発行

第10回 きじむんの どう〜ちゆいむに〜

～医学部内 高嶺徳明顕彰碑～

いいそ〜くわちで〜びる！ きじむんやいび〜ん。皆さん、今年もどうぞよろしくおねがいします。
今回は、医学部にある高嶺徳明顕彰碑を案内します。

たかみねとくめい 高嶺徳明顕彰碑

琉球大学医学部構内がじゅまる会館前の広場に高嶺徳明顕彰碑が建立されたのは平成5(1993)年12月1日です。沖縄県医師会の寄贈によるもので、琉球王国において初めて全身麻酔を用いた口唇裂の手術を成功させたと記録されている久米村士族・魏士哲(高嶺親方徳明：たかみね・あやかた・とくめい)の業績を顕彰しています。

ましてつ 魏士哲(高嶺親方徳明)とは

魏士哲は順治10(1653)年生まれで、もともとは久米村の出身ではありませんが、中国語の能力を評価されたことで久米村に入り、魏姓を賜りました。久米村とは現在的那覇市久米のことを指し、この地には通訳等で琉球王国の対中国外交を支えた人々が代々住んでいました。中には、明朝時代に福建から移住した中国人(閩人三十六姓)の子孫もあり、魏士哲も彼らと同じく、久米村の役人として勤めをはたしていました。

康熙27(1688)年、魏士哲35歳の時に、進貢船の小唐船臨通事(進貢二号船在船通事)として福州へ赴きました。この時、福州に来ていた水主(水夫)のひとりに、生来口唇裂であった与那嶺という者がいました。五主(ごしゅ：貿易の実務担当者)として福州にいた与那嶺の妻の弟である大嶺詮雄(おおみねせんゆう)は、中国語が巧みであったため、福州に口唇裂の治療ができる医師の存在を知り、与那嶺に治療を受けさせることができました。

この話を聞いた進貢使節の正使や副使は、魏士哲にこの医師から手術法を学ぶよう指示します。というのも、当時、王孫(後の尚益王)が口唇裂であったためでした。与那嶺を治療した医師は黄会友という名で、魏士哲は彼の元で学び、薬方など「秘書一卷」を得て康熙28(1689)年の5月に琉球に帰国しました。その後、琉球国内の口唇裂の男女を治療した後、同年12月に王孫の尚益の治療に臨み、成功したと魏士哲の家譜に記されています。

魏士哲が手術を成功させたとされる康熙28(1689)年は、和歌山の華岡清洲が麻酔による乳がんの手術を成功させた1804(嘉慶9・文化元)年より100年以上もさかのぼります。医療史の立場から揺るぎない確証が得られているわけではありませんが、今後の研究によってさらに明らかになることがあるかもしれません。

まだまだ、紹介していないスポットがあります。詳しくは次回に！(沖縄資料担当：CT)

参考文献

- 東恩納寛博「医方漫談」(『東恩納寛博全集』第9巻、1961年)
- 那覇市企画部市史編纂室編『那覇市史』資料編1-6 家譜資料(上)(那覇市企画部市史編纂室、1980年)
- 池宮正治・他『久米村-歴史と人物-』(ひろぎ社、1993年)
- 琉球大学医学部附属地域医療研究センター編『沖縄の歴史と医療史』(九州大学出版会、1998年)



平成27年1月5日発行

第11回 きじむんの どう〜ちゆいむに〜

～戦車壕あと ポージウシューヌカー 共通教育棟前拝所～

ハイサイ&ハイタイ!みなさん、寒くなりましたね～。風邪にご用心!では今月も始めます。



戦車壕あと

戦車壕あと

50周年記念館（以下「記念館」と省略）横の放牧地一帯（農学部附属農場の一部）は、かつて車道が通り、集落がありました。痕跡は現在も確認できます。また、戦時中は旧日本陸軍が弾薬庫や壕を設営していました。記念館から環境安全センターまでの中間地点に柵で囲われた戦車壕あとがあります。壕周辺ではかつて牛を放牧していたのですが、ある日牛が壕に落ち、戦車壕あとがあるとわかりました。

（農学部：平川守彦准教授談）



建物手前の盛土が「ポージウシューヌカー」

ポージウシューヌカー（坊主御主の井戸）の話

この井戸は、本学農学部の北側駐車場近くにあります。ポージウシュー（坊主御主）とは第二尚氏・第17代国王の尚濂（しょうこう）王（1804-1834年在位）のこと。晩年病を得、千原の鶴原山で隠居生活をおくりました。その時使われた井戸が「ポージウシューヌカー」と呼ばれています。井戸は、本学移転工事の際破壊の予定でしたが、首里のノロから残すように言われ、井戸の周りをコンクリートで四方囲いにして盛土を施してあります。

共通教育棟前拝所

共通教育棟前には霊石（「賣頭處（びんずる）」）を祀る来歴不明の小さな祠（ほこら）があります。ご存じのかた、きじむんまでぜひ情報をお寄せ下さい。（沖縄資料担当：NK）



拝所正面



拝所斜めより。奥は教育センター

参考文献

仲興勇栄・仲池宗俊・菊池香「琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査」『琉球大学農学部学術報告』第49号 P60（琉球大学農学部：2002）/取材協力：琉球大学農学部 亜熱帯地域農学科

平成27年2月1日発行

第12回 きじむんの どう〜ちゅいむに〜

～法文学部・観光産業科学部前 日時計～

ハイサーイ！ キジムンヤイピーン。

今回は法文学部・観光産業科学部前にある日時計を案内します。



日時計正面



円盤

法文学部・観光産業科学部正面玄関前の芝生に日時計が設置されています。この日時計は、平成8（1996）年5月に短期大学閉学を記念して設置されました。日時計本体の円盤は真鍮製の直径100cm、台座は久米島産の安山岩が使用されていて、高さ73cm、縦横約150cmです。

台座部正面には「向学ノモン」と、古代ギリシャ哲学者ヘラクレイトスの言葉「太陽は日々新しい」が刻まれています。日時計の影を落とす部分をgnomon（ノモン）といい、古代ギリシャ語では指針という意味。「向学ノモン」は「学ぶ者の指針」という意味になります。また、円盤には世界の主要都市の方向が刻まれています。琉大キャンパスから真理と正義と平和を愛する青年達が世界へ羽ばたいていくようにと願いをこめてこの日時計を建てた、と台座部東側に張りつけてあるプレートに記されています。よく見るとノモンの部分が鳥になっていますよ。

日時計に関連して、ここで少し琉球の時計の歴史を紹介します。琉球王国時代は主に首里城内の漏刻門に設置された水時計（漏刻）で時刻を計り、その補助として日時計や砂時計も併用していました。当時の水時計は不正確であったため、尚敬27（1739）年に蔡温が日時計の正確な測定法の発明改正を行いました。蔡温は刻時森（ククジムイ）と呼ばれる小高い丘（現在の西原町字幸地、アドベンチストメディカルセンター後方）に日時計を設置し、役人をおいて時刻を観察させてデータをとりました。尚敬32（1744）年以後はそのデータをもとに改正した測定法で時報を行ったとされています。琉球大学資料館（風樹館）には首里城で使われていた日時計の破片が残されています。現存するのは本資料のみで、現在首里城にある日時計の復元の基礎資料となりました。



漏刻門日影台方位盤の破片
【琉球大学資料館（風樹館）所蔵】



今年度のどう〜ちゅいむに〜は今回で終わりです。全12回、琉球大学内外にある史跡や遺物を紹介しましたが、いくつ知っていましたか？知らなかった場所があったら、琉大内外の史跡・遺物マップの冊子を片手に足を運んでみてくださいね。

（沖縄資料担当：AH）

参考文献

- 琉球大学閉学50周年記念史編集専門委員会編『琉球大学五十年史』（琉球大学、2000）
- 西原市史編集委員会編『西原市史第五巻資料編四』（西原町役場、1996）
- 那覇市企画部文化振興課編『那覇市史通史第1巻』（那覇市役所、1985）

平成27年3月2日発行